

茶聖の横顔

千利休

茶聖の横顔

千利休 (1)

私には茶道の知識や心得が、ほとんどありません。しかし茶聖と呼ばれた千利休の落日に似た生涯に、諸行無常の思いを強く抱いております。

堺の今市に生まれました。名は与四郎、父は千与兵衛。家業は魚屋ですが、貸倉庫業や運輸業も営み、裕福な商家でした。

彼が利休と名乗ったのは64歳からで、それまでの茶名は千宗易ですが、本稿は利休で統一します。また利休の研究書は山ほどある。私の利休伝が気に入らぬ方はそちらをお読みください。

先祖については諸説あります

が、慶安6年(1653)幕府は徳川家康の正確な年譜を作るため、表千家4代家元千宗左に利休の履歴書を提出させます。

その中に利休の祖父は8代將軍足利義政のお伽衆(大名の世間話の相手を勤める文人)田中千阿弥だと記されています。千阿弥は朝鮮から移住した教養豊かな人物です。そういえば利休の茶室の構造は、朝鮮の古い民家

に似ており、茶道具も高麗(朝鮮王朝のひとつ)のものが多くあります。

祖父千阿弥がいつ亡くなったのかは分かりませんが、利休の「緑苔墨跡」という文章に、「祖父(法名道悦)の七回忌に墓参

したが、当時私は貧しかったため満足な法事もできず、墓には苔が生えていた」との内容が記されています。

父の与兵衛は抜群の商才があり、独力で大店の主になり、堺の納屋(海岸に設けた交易商品を置く倉庫のこと)十人衆のひとり、お金持ちです。本名は田中与兵衛ですが、父千阿弥の名を残そうと「千与兵衛」と改姓しています。利休は親孝行で18歳のとき死別した父の法事を毎年盛大に営み、あの命取りになった京の大徳寺の重層山門は、

父の五十回忌法要記念に建造寄進したものです。

利休の母については分かりかねます。法名は「月岑妙珍」ですが、本名を含めてどんな女性だったかの資料はありません。

3人の妻、9人の実子、義理の息子1人

利休には3人の妻がいます。

ひとりは天文11年(1542)頃に結婚した女性(本名不明)で、天正5年(1577)死亡したとき、法名「宝心妙樹」がつけられています。利休との間に1男3女があり、この長男が千家を分裂させた道安です。

ふたりめは妙樹が没した翌年に結婚する法名宗恩です。彼女は利休が能を習っていた師匠宮王三郎三入の妻で、三入の生前から親しかったらしく、天文22年(1553)三入が病死するとすぐひきとって、宗恩と息子の少庵母子の面倒をみています。56歳のとき利休は宗恩を正妻に直していますから、ずっと二人の妻がいたことになります。

いや、もうひとりいる。この妻は本名も法名も不明ですが、田中宗慶はじめ5人の子がいま

堺の裕福な商家に誕生 祖父は足利義政のお伽衆

利休は大永2年(1522)





おあさか昔茶談

291

文 三善 貞司 (地域史研究者)
切り絵 塩入 みや子

す。つまり利休には9人の実子と義理の息子1人。合わせて10人の子の父親です。宗慶は豊臣秀吉から汝の業は日本一じゃとほめられた陶芸の達人です。宗慶の妹のお亀は義理の息子少庵の妻で、宗慶の誕生は天文5年(1536)ですから、利休の14歳のときの子になり、宗慶の母が利休と最初に結婚した女性でしょう。

道安と少庵はともに茶道の師匠になります。あるとき父利休は道安に、「お前。少庵に習ったらどうか」と声をかけます。道庵はまっ赤になって、

「あんな軟弱な奴に学びとうはない」

と怒ったので利休は、「こいつ、おれのほんまの子や。見所がある。いい茶人になるぞ」と目を細めたとの逸話があります。茶聖千利休もやはり親バカのひとりですね。

道安と少庵は、個性も茶の精神も正反対でした。道安は「剛と動の茶」、少庵は「柔と静の茶」と言われます。利休の死後2人は激突し、道安は人気の高い少庵を嫌って放浪の旅に出ます。利休を知るのには、まず以上の家族構成知識が必要です。

茶聖の横顔

千利休 (2)

堺に生まれた利休の少年時代、堺の町の様子を宣教師フロイスは、次のように書いています。

「堺の人はプライドが高い。ぜいたくを美德とし、国家権力も及ばぬ自治組織がある」

たしかに堺は国内の各都市と活発に物産を取引きし、外国貿易の拠点でもあり、会合衆（各商家の代表者）が自主的に政治・経済を運営し、日本で一番繁栄した都市でした。

やはり宣教師のルイスは、「来客があると、草を粉末にしたもの（茶）を宝物の碗に入れてだし、秘蔵の美術品を座敷に飾ってみせびらかせた」

「この粉末を飲ませるために特別の部屋をこしらえ、秩序整然たる儀式をとり行つてからすらすらせる。これが最高のもてなしだそうだ」

とふしぎそうに書いています。

斬新なアイデアと経済力で22歳にして茶会を初主催

こんな堺で魚屋千与兵衛の息子利休は大きくなり、天文7年

(1538) 10歳のとき北向道陳に入門し、本格的に修業を始めます。道陳は8代將軍足利義

政のお伽衆（大名の話し相手の文人）能阿弥（利休の祖父千阿弥の同僚）の弟子で茶人の空海（弘法大師ではない）に学び、豊かな商人のくせに空海を真似てみずばらしい庵に住み、風流を楽しんだ変人です。

利休はよほどの才能があったのでしよう。天文13年（1544）2月、有名な京の茶人松屋久政を主客に招き、初めて茶会を催しています。22歳のときですからバックに道陳がいたとはいえ、大変な出世です。のちに久政は「久政茶会記」と題した冊子を残していますが、この茶会のありさまを、

「床二八善幸香炉 板釣瓶 珠光茶碗 香炉内角アツク 腰ノ上下二指アト二筋アリ」

と記しています。「善幸香炉」

は村田珠光（一休禅師の弟子。禅味を加えた茶道の創始者）の秘蔵品で、珠光茶碗も彼が愛した唐物（中国陶器）、この二つを並べたから、久政も目をむきました。

また同冊子には振舞い（茶会の料理）について、

「フ汁 タウフ ツクツクシ 引物（膳に添えるもの）クラゲウド カヤ クリ 飯ハクモタコ」

とあり、茶道に詳しい知人に尋ねると、この時代の献立にしては斬新（アイデアが奇抜）だとのことでした。若い利休のみはずれた経済力と、すでに利休流の茶道をめざしていたことが、よく分かります。

行き届いた心配りの庭掃除 紹鷗に見込まれ、弟子入り

この茶会は大変な話題を集め、高瀬屋宗幸、木屋宗祐、若狭屋宗可、住吉屋宗全ら堺の茶好き豪商たちも、若僧利休に一目置くようになります。いつしか天狗になりかけていた利休を、師匠の道陳は甘えるな、もつときびしい修業をせよと首根っこを押しさえ、武野紹鷗に弟子入りさせました。

せました。

紹鷗は村田珠光の高弟宗悟に師事し、茶と禅の一致をめざした天下一の茶人です。古典や和歌も茶に必要なだと勉強し、学者以上の知識と教養を身につけ、道陳も心から尊敬していました。

ある日、紹鷗の屋敷の庭で、手入れをしていた下僕（当時の言葉）が、ゴミをそのまま残してどこかへ行こうとします。縁側にいた紹鷗が気づいて、掃除はすんだかいなと声をかけると、

「へえー、あとはゴミ捨てるだけやが、番頭はんが呼んでるさかい、ちよいと行つて参じます」と答えます。

そのとき物かげから見知らぬ男がとびだし

「はよ行つてきなはれ。ゴミは片付けておきますよて」

と、ほうきとちりとりを受けとり、どないするやると紹鷗が見ていると、庭木を残らずゆさぶって葉を落とし、はじめからやり直してきれいに清めました。「ほほう、おもしろい男や、どなたかな」と紹鷗は尋ねます。この男が利休でした。紹鷗は感心し、道陳の紹介状を読むまでもなく、喜んで弟子を迎えたといわれます。



あおさが昔と竹藪 (292)

文 三善 貞司 (地域史研究者) 切り絵 塩入 みや子

茶聖の横顔

千利休 (3)

くみこまれる流れに順応できず、織田信長にひどく嫌われました。

信長、秀吉に名器を献上 実休の茶会で政治に接近

師範)に任じられました。

本能寺の変で信長が死に羽柴秀吉が天下を掌握、宗瓦は堺に戻ってきますが、今度は秀吉にも憎まれ、天正16年(1588)宗瓦が命をかけてかくした父の形見「天目茶碗」「備前水こぼし」「赤金茄子盆」を秀吉に奪われたうえ、ふたたび追放されます。秀吉は宗久もクビにして利休を茶頭にしますが、恩師の息子を庇うどころか、茶人としての生命まで絶った秀吉に加担したのです。私は利休を非難する気はない。独裁者たちにもてあそばれた茶人の哀れさ、悲しさを綴ったつもりです。

才能と財力にものをいわせて

天狗になつていた若い利休を案じた師匠北向道陳は、茶と禅の一致をめざしていた天下一の茶人武野紹鷗に弟子入りをさせます。紹鷗はひと目見てこの若者こそわしの後継者になるとほれこみ、徹底したきびしい修業を課します。茶の精神「和敬静寂」は、この紹鷗が授けたエスプリ(精髓)です。

武野紹鷗の愛弟子利休 史上に残る茶振舞

弘治元年(1555) 33歳になつた利休は、紹鷗を主客に、堺を代表する豪商今井宗久・万代屋宗安らを客人に招き、茶会を開きます。そのときのありさまを記した宗久の文章を、わかりやすくして紹介します。

「風呂(湯をわかす炉)は雲竜釜(雲の中の竜の図柄)を掛け、床に牧溪(中国の文人)の自画像を飾り、客が手水(手洗

い)に立つたあと軸を変える。棚には布袋の香合(香入れ器)と羽ぼうきを配す。金輪寺茶(特上茶)、信楽の水指、高麗(朝鮮)茶碗、面痛(水こぼし)、引切(釜のふたを置く竹製品)も工夫を凝らした道具立てで、史上に残る茶振舞(茶会)であった」。

この半年後に紹鷗は53歳で死去しますから、おそらく彼は最後の力をふりしぼって、愛弟子利休の茶会の主客を務めたのでしよう。ところが後に利休は、こんなにかわいがつてくれた師の息子武野宗瓦を茶道界から追放するのに、一役買っています。宗瓦は子のない紹鷗の晩年に思いがけなく生まれた子で、父が没したときまだ3歳でした。利休は親代わりになつて育て茶も教えますが、才能は抜群ながら世渡りが下手、自分の思いどおりにならぬと利休でも宗久でもどなりつけます。おまけにかんしゃくもち、茶道が政治機構に

信長は「名器狩人」といわれたほど天下の名器を集め、手柄をたてた武将に恩賞として与えます。利休も宗久も平伏して茶道具を献上しご機嫌をとります。宗瓦はあんな粗野な男に茶が分かるものかと拒みます。「若師匠、命が危ない。早くさしあげなさい」と利休は、父の遺品として大切にしていた「紹鷗の茄子」と「松島の茶壺」を無理にとりあげ、信長のもとに持参して宗瓦の命乞いをしました。

喜んだ信長は天正5年(1577)、紹鷗所持の茶道具すべての名を書いた手紙を宗瓦に届け、残らず献上せよと命じます。信長が紹鷗のコレクションを知っているはずはない。宗久か利休が信長にとりいるために、知らせたのでしよう。もちろん宗瓦は拒絶したから信長はかんかんになり、茶道具どころか家屋・土地まで没収し堺から追放します。逆に二人はひいきされ、とくに宗久は茶頭(織田家の茶道

師範)に任じられました。本能寺の変で信長が死に羽柴秀吉が天下を掌握、宗瓦は堺に戻ってきますが、今度は秀吉にも憎まれ、天正16年(1588)宗瓦が命をかけてかくした父の形見「天目茶碗」「備前水こぼし」「赤金茄子盆」を秀吉に奪われたうえ、ふたたび追放されます。秀吉は宗久もクビにして利休を茶頭にしますが、恩師の息子を庇うどころか、茶人としての生命まで絶った秀吉に加担したのです。私は利休を非難する気はない。独裁者たちにもてあそばれた茶人の哀れさ、悲しさを綴ったつもりです。

話をもどします。紹鷗が没した3年後の弘治4年(1558)、利休は実休の茶会に秘宝の「珠光茶碗」を貸し、実休を夢かとはかりに喜ばせました。

実休は芥川城(城跡・高槻市)の城主で、足利幕府の実力者大名三好長慶の弟、三好豊前守義賢のことです。彼は風流を好み、とくに茶の世界では「茶湯大名」と呼ばれた男です。この茶会は有名な戦国武将たちを招いて三好一族に味方させる大事な催しでしたから、利休に抱きついて喜びます。魚屋の伴利休が政治に接近したのは、これからです。



おおさが昔さ竹藪

293

文 三善 貞司 (地域史研究者) 切り絵 塩入 みや子

茶聖の横顔

千利休(4)

織田信長が茶道に関心があったかどうかは、分かりませんが、天下布武（武力で統一すること）の野望を抱いた彼は、貿易都市堺に莫大な矢銭（軍用金）を課し、茶道具を没収します。

茶室外交を展開する秀吉 独自の利休を評価

延暦寺まで焼打ちした乱暴な信長から、堺が戦火を免れたのは、会合衆（堺の市政を仕切った豪商たち）の一人で茶人の今井宗久のおかげです。宗久はひたすら信長のご機嫌をとり、会合衆から矢銭を集め、武野紹鷗の息子宗瓦が秘蔵する遺品の茶道具をとりあげ、信長に献納します。信長は宗久を茶頭（茶道師範）に任命、茶会を開いては合戦で軍功のあった家臣たちに、恩賞として茶器を与えました。家臣たちはおたがいにみせびらかせて自慢します。なんのことはない。信長は自分の腹を痛め

ずに、部下たちを茶器でこき使ったのです。茶道が政治と結びついたのは、こういったいきさつからでした。

本能寺の変で信長が自害したあと、羽柴秀吉もこのやりかたを真似ます。彼は信長の実子や、柴田勝家ら譜代の先輩武將らを倒し、今井宗久までクビにしてお気に入りの利休を茶頭に起用します。

天正10年（1582）10月、明智光秀を滅ぼした秀吉は「合戦勝利の記念じゃ。山崎に独自の茶室を作れ」と、利休に命じます。これが現在も妙喜庵（京都府長岡京市大山崎町）に残る茶室「待庵」の原型です。大きなことが大好きな秀吉は、たった二畳敷きのわびしい茶室にびっくりしました。こいつ、わしにおべっかない骨のある奴じゃ…と今度は翌11年大坂城にも二つの茶室をこしらえさせます。その一つが有名な「黄金の茶室」です。

これは組立て自由でどこへも持っていける豪華絢爛たる金ピカ茶室で、釜をはじめ道具類まで黄金、緋もうせんを敷きつめた前代未聞のこしらえです。もうひとつは「山里丸茶室」。こちらは「古木など用ひさびたる趣」と記される数寄屋（風流茶室）、つまり黄金茶室は諸大名に富と権勢を誇示する所、山里丸茶室は秀吉が独りで瞑想・休息する憩いの場でした。秀吉は大満足、改めて利休の才能を高く評価します。

天正13年（1585）10月、関白になった秀吉は、利休を従えて宮中に入り、日本初の禁中（皇居）茶会を開き、利休を茶頭に自ら茶を立て、正親町天皇にふるまいます。利休も「一世の面目これに過ぎず候」と、天下一の茶人に公認された喜びを書いています。ときに秀吉48歳、利休は63歳でした。

居士号を得て禁中茶会 「内々の儀は居士に…」

なお利休は無位無官なので、昇殿は許されません。それで禅の師匠大徳寺住職古溪から、「利休居士」との居士号を与えられます。居士号があれば昇殿可能

で、それまで宗易と名乗っていた彼は、以後利休と称します。つまり利休と呼ばれたのは、自害するまでの7年間だけでした。好き嫌いが信長以上に激しくなった太閤秀吉は、利休をめちやくちやにひいきします。いつの間にか茶頭どころか側近の奏者（権力者に用件をとりつぐ役）のトップになっていました。

当時、大坂城を訪れ秀吉の豪勢な暮らしに目を回した九州の大名大友宗麟は、秀吉の弟で右腕の豊臣秀長から、

「内々の儀は居士（利休）に、公儀なら宰相（秀長）が存じ候」と耳打ちされたと書いています。石田三成もさる大名から関白様にとりついでほしいと頼まれた書状に、
「居士の追而書（添書のこと）が必要じゃ」と付箋をつけて返却します。

「居士ならでは関白様に一言も申し上ぐる人無之」とまで古書に記された利休は、ウラ外交にもけたはずれの策略を発揮、徳川家康や島津義久ら反秀吉派の有力大名を、うまく懐柔するのにも役立ちます。細川藤孝はじめ多くの大名が弟子入りし前田利家、毛利輝元ら大大名まで利休に媚びるありさまでした。



資料：ぎょうせい「歴史と文学の回廊」より

おおさが昔さ竹談 292

文 三善 貞司 (地域史研究者) 切り絵 塩入 みや子

茶聖の横顔

千利休 (5)

天正15年(1578)秀吉は、有名な北野大茶会を催します。男女・年齢・身分を問わず、誰でも参加できる茶振舞いです。公卿・大名から武士、農民・町人まで集まる大群衆のなか、秀吉の設けた茶席には、どつかと利休が座りました。

北野大茶会から一転 切腹を命じられた理由は

続いて聚楽第(秀吉が京都に建てた超豪華な邸宅)に、一畳半茶室、古刹大徳寺の門前に四畳半茶室「不審庵」を設け、飛ぶ鳥をも落とす威勢をみせた利休は、突然、秀吉に切腹を命じられます。

直接の原因は天正17年(1580)利休が亡父千与兵衛の50回忌供養に、大徳寺に寄進した山門「金毛閣」に、自分の木像を置いたからだと言います。金毛閣は2層の大建築で、利休は頭巾をかぶり杖を突き草履をは

を利休に渡した。利休は茄子型は宗室も持っている、自分ももらい、代わりに般若の茶壺と50両を渡し、宗室から軸を受け取った。あとで知った秀吉は、かんかんになって怒った。

③諸大名が献上した茶道具を勝手に売りさばき、代金をさしだした。秀吉は俺を商人にするつもりかとなりつけた。

④助左衛門が持ち帰ったルソンの壺は、利休のひとことで価格が倍になり、秀吉の機嫌をそこねた。

などですが、利休と仲の悪かった木下祐佳(北政所ねねの一族)や、茶の知識がとぼしく利休に大恥をかかされた前田玄以(京の治安の最高責任者)たちが、いいふらした悪口もふくまれるあやしげなものばかりです。

朝鮮出兵、女、茶道…さまざまに秀吉と対立

とはいえ、利休から頭ごなしに茶の指導をされた田舎大名は、いっばいいます。

「クソ！あいつは堺の魚屋やないか。虎の威を借る狐め…」と不快に思った人たちの恨みや妬みが積もり重なって、尾ひれがついて秀吉の耳に入ったの

は確かです。

こんな話もあります。利休はキリシタンに同情し、秀吉の朝鮮出兵に猛反対したのが原因だ。いや、ちがう。船岡山(京都市北区)にある古墳群を壊して、茶室の庭石に移したから秀吉にいらまれたなどです。

女だ、との説もあります。利休の娘で万代屋宗庵の妻お吟を秀吉が見初め、側室に望んだのを利休が断ったというものです。これは今東光の名作「お吟さま」で有名ですが、あれは小説です。茶道のありかたをめぐつての対立だとも、よく言われます。

秀吉は贅沢・華美を好み、わび茶の質素な情緒を説法する利休が鼻につき、感情を害しました。「黒キ二茶タテ候コト 上サマ才嫌ヒ」と書かれた秀吉を、まっ黒な楽茶碗で接待します。秀吉の好みはまっ赤か金色です。こやつ、太閤を侮辱しやがる…と顔をしかめたそうです。

天正19年(1591)利休の最大の庇護者豊臣秀長(秀吉の異父弟)が病死しました。彼は昔、兄に鉄砲買うてこいと命じられ、鉄砲生産では日本一の堺に来ますが超貴重品、おいそれとは売ってくれない。参っていた秀長を助けたのが利休でした。



おおさが昔さけ

293

文 三善 貞司 (地域史研究者) 切り絵 塩入 みや子

茶聖の横顔

千利休 (6)

145

利休が一瞬のうちに秀吉に嫌われた最大の原因は、天正19年（1591）の弟豊臣秀長の病死でした。昔、兄の命令で堺に鉄砲を買いにきて、相手にされなかった秀長の、世話を焼いたのが利休です。以来2人は固い絆で結ばれ、利休が異例の出世をしたのも秀長の庇護があったからです。

秀吉に嫌われ堺で謹慎 昨日は極楽、今日は地獄

秀長が亡くなってまもない1月11日、1年半も前に利休が大徳寺に寄贈した豪華な山門「金毛閣」に、自分の木像を置いたのは増長の象徴だといいがかりをつけられます。びっくりした利休は、秀吉のお気に入りの大名で茶の弟子でもある細川忠興や芝山堅物らに頼み、必死になって弁明しますがため

した。監物をもっともあてにした大名蒲生氏郷でさえ、「一笑一笑（もうあかんの意味）」と手を横にふります。

堺の会合衆（堺の市政をとりしきった富商の代表者たち）の仲間、住吉屋宗無や万代屋宗安も、利休の手紙に顔をそむけます。まさに昨日は極楽、今日は地獄でした。

2月14日、秀吉は利休に堺に帰り謹慎せよと命じます。このとき利休が愛娘お亀にあてた和歌が、利休めはとかく果報の者ぞかし菅丞相になると思へば

です。菅丞相は無実の罪で太宰府に流された菅原道真のことです。利休のおでかけとなると砂糖にたかる蟻のように集まった人影はなく、淀の渡しに見送りに来たのは、細川忠興と古田織部の2人だけでした。

2月16日、利休は芝山堅物にこ

んな内容の手紙を書いています。

「あなたのお骨折り、冷たい世間だけにひとときわ身にしみませぬ。あわれな小舟で流される私は、熱いお情けに、涙、また涙、涙がこみあげてきます。この気持ち、歌を詠んでさしあげたいのですが、悲しいばかりで言葉になりませぬ」

切腹する少し前、秀吉に遠慮なくもの言えた前田利家から、正室北政所（ねね）を通じてわびを入れれば、太閤も許してくれようと知恵をつけられます。ところが利休は、男がご婦人がたに命乞いを頼むのは無念だ、それなら処刑されたほうがいと断っています。茶聖のプライドでしょう。

一畳半茶室で独り茶会 直後、武人の心意気で切腹

今井宗久と一緒に織田信長に仕えていたころ、利休は14歳も年下の秀吉を、立ったままで「藤吉郎」と呼びすてにしていました。秀吉は手をつけて「はい、宗易さま（当時の利休の茶人名）」と返事をしています。天王山の合戦のころから「筑州（羽柴筑前守の略称）」となり、やがて「上様」、最後に「関白様」となるのですが、心の隅のどこかに「この成り上がりの



美



おあさか昔さか哉

294

文 三善 貞司 (地域史研究者)

切り絵 塩入 みや子

猿め」といった意識があつたのかも知れません。

また秀吉のほうも大権力者・独裁者になつた今、かつての利休の横柄な面影がひよいと浮かび、卑屈に振舞つた過去の自分がいまいましくなつて、茶坊主のくせによくもあのととき威張りやがつたな…と憎しみがつたとも思われま

す。
2月25日、秀吉は金毛閣に飾られた利休の木像をひきずりおろし、なんと戻橋(京都市上京区一条通堀川)にさらして、磔の刑にしました。木像をですよ。

前代未聞の刑罰はたちまち世間の評判になり、知らせは堺にまで届きます。利休はいよいよ最期のときがきたと思ひ、あの有名な辞世を詠みました。

ひつつさぐる我が得具足(好きな所有道具類のこと)の一太刀
今此時そ天に投げ打つ

です。まさに武人の心意気です。
2月26日、利休は秀吉の使者たち引つ立てられて、京の聚楽第(秀吉が京都に建てた華麗壮大な屋敷)に移り、自分が設計し秀吉が激賞した一畳半茶室にこもつて、独りで茶会を開きます。その直後見事に腹を切りました。介錯は門人で武將の蒔田淡路守。享年69歳。

茶聖の横顔

千利休(7)

146

天正19年(1591)2月26日、京の聚楽第で69歳の利休が切腹した日は、大雨が降り雷鳴とどろくものすごい春の嵐が吹き荒れていました。

木像とともにさらし首

利休死後、千家の茶道は

屋敷の周りは上杉景勝が指揮する千名もの軍勢が、弓矢や槍鉄砲まで用意して嚴重に警戒します。利休門下の大名たちが、利休救出のため実力行使にでるとの噂が流れたためですが、ねずみ一匹現れませんでした。

利休の首は検使(見届け役)安威撰津守と尼子三郎左衛門が秀吉に届けますが、秀吉は見向きもせず、戻橋(京都市上京区一条通り堀川)にさらせと命じます。橋の欄干には金毛閣(利休が寄進した大徳寺の山門)に飾られた利休の木像がぶら下がっており、その下に首がさらされます。つまり自分が奉納した木像で、踏み付けられた無惨なありさまでした。

続いて秀吉は、金毛閣の建築を許した大徳寺住職古溪を含め、3人の長老を死刑にします。驚いたのが宗教心に厚い北政所ね

ねです。秀吉の実母なかと2人で、それだけはおやめなさいと必死になつてとめます。このとりなしがなければ、名僧古溪も処刑されたことでしょう。秀吉の利休への憎しみは、これほどひどいものでした。

利休については以上で終わりますが、その後どうなったかについてお話しします。本連載①で記したように、千家の茶道は長男の道安(先妻妙寿との子)と、義理の息子少庵(後妻宗恩の連れ子。父は利休の能楽の師匠宮王三郎)が継ぎました。

利休の死後、秀吉は茶道具はもとより、土地家屋から全財産を没収し、2人を追放、道安は飛騨(岐阜県)高山城主金森長近に、少庵は会津若松(福島県)城主蒲生氏郷に、罪人として預けられます。

道安と少庵は、個性も茶道哲学も雲泥の差がありました。「剛・動の茶」といわれた道安は、少庵を世渡り上手の軟弱者と軽蔑し、偏屈な性格もあつて一匹狼として生きます。少庵は「柔・静の茶」といわれ、謙虚で温和な人柄もあつて、誰からも好かれました。太っ腹の氏郷は彼を茶頭(茶道の師匠)に任命し、家臣たちに教授させます。今も会津城に保存される茶室「麟閣」は、そのために設けたもので、白虎隊記念館と並んで多くの観光客が訪れています。

赦免後、明暗分けた

剛・動の道安、柔・静の少庵

いつぼう秀吉も怒りにまかせて利休を処刑したものの、後悔の念がわいてきたようです。翌20年には実母なかにあてた手紙の中に、きのうは利休の茶道具をとりだして茶会を開いたとか、京の奉行前田玄以に伏見城の普請には、かならず利休好みの茶室を用意しろと命じておいたなどと、書いた部分があります。

利休門下の大名たちも、あれほど残酷な仕打ちをしなくてもよかったのではないかとの声を

美



おあさか昔と茶談

295

文 三善 貞司 (地域史研究者)
切り絵 塩入 みや子

あげ、古田織部おりべ (有名な茶人大名・織部焼の祖) は周りがとめるのも聞かず、茶会に利休筆の軸を掛けますが、なんのおとがめもありませんでした。

蒲生氏郷・前田利家・徳川家康ら大大名は、今がチャンスだと道安・少庵の赦免を願いでます。秀吉を操るには秀吉がその気になりかけたとき懇願して、「汝らがそれほど頼むのなら、聞いてつかわす」「へへえー、ありがたき幸せ」とやるのが、コツです。

文録3年(1594)利休の死後たったの3年間で2人は許され、秀吉は上機嫌でとりあげた茶道具を、全部少庵に与えました。面白くない道安は、「あなたは千家の嫡男です。どうぞお受けとりください」と少庵が茶道具を差し出す手をはらいのけ、手ぶらで故郷堺に帰ってしまいます。これが道安の悲劇の始まりでした。利休の門人たちは、残らず少庵についたのです。生前利休は、道安を偏愛していました。家督と千家の茶道は道安に継がせると明言しています。自害の直前、全財産も道安に譲ると書面に記し、花押かぢ(署名の下の印)を押したほどです。

茶聖の横顔

千利休 (8)

利休が自害したあと千家の茶道は、実子で長男の道安と、後妻の連れ子少庵が継ぎます。

明暗分けた道安と少庵

千家茶道普及は少庵の手で

少庵は才能はともかく温厚・謙虚な人格者で、自分は血のつながらぬ義理の子だ、当然道安兄さんが正当な後継者だと考え、秀吉が没収していた利休の茶道具類を少庵に返却したとき、全部道安に差し出します。ところが一匹狼タイプの道安は面白くない。白い眼でにらんで受け取らず、さつさと堺の利休屋敷に独りで帰ってしまいました。

しかし堺の会合衆（堺の市政を担当した豪商たち）とも全く気が合わず、門人たちも遠去かり、やけくそになって放浪の旅に出ては無一文になって戻ってくる荒れた生活を重ねます。晩年は泉南道安と名乗って世を捨て、ウツ病のようなありさまで慶長12年（1607）死亡、堺

ころからその才能にびっくりしていた少庵は、千家を継ぐ道安と対立したら大変だと考え、大徳寺に入れ禅僧にしようとしたぐらいです。

紹鴎が種を、利休が花を

「我友宗旦により茶は成る」

慶長5年（1600）少庵は、伯父道安は茶を捨てた、お前しか千家の茶道を伝える者はいないと宗旦を還俗（俗人に戻る）とさせ、家督を譲って自分が仏門に入り、二度と世に出ることはありませんでした。

祖父利休が切腹したとき宗旦は、まだ14歳の多感な少年です。大変なショックで茶が政治に巻き込まれてはならないと、固く心に誓います。

時は流れ徳川幕府は宗旦を徳川家の茶頭（茶道の師匠）に招きますが、病気を理由にひたすら拒み、他の大名がどんなに好条件で誘っても、首を横に振りました。そのため誰からも尊敬される茶人になっても生活は困窮し、世間は「乞食宗旦」とのあだ名をつけています。江戸の文化人No.1本阿弥光悦の言葉に「我友宗旦により茶は成る」とあります。「わび茶」は、宗旦

の生活を伴う実践により完成した、との意味です。

少年時代の8年間、大徳寺で修行した禅の体験と、祖父利休から父少庵に流れた「茶禅一味」

「和敬静寂」の哲学を見事に生かした乞食宗旦の茶が、現在も愛好される千家茶道の根幹です。利休の恩師武野紹鴎が種をまき、利休が花を咲かせ、宗旦が実を結ばせたことは、宗旦が工夫した一畳半の極小茶室に、よく表れています。

宗旦には4人の男の子がいます。長男宗拙は貧しい生活に徹した父と気が合わず、とびだして千家を離れます。次男宗守は京の武者小路（上京区）に茶室「官休庵」を設け、武者小路千家の祖となり、3男宗庄は父の信頼厚く「不審庵」を与えられ、不審庵4世表千家を、4男宗室も「今日庵」を譲られ、今日庵1世裏千家を名乗ります。こうして利休の茶道は、「官休庵武者小路家」「不審庵表千家」「今日庵裏千家」の三家に分かれ、現在に至っています。

利休は歌人としても優秀ですが、狂歌はもっと上手です。彼の素顔はひょうきんで、粋な人物だったような気がします。



美

あおさが昔と竹藪

296

文 三善 貞司 (地域史研究者)
切り絵 塩入 みや子